

平成27年度第2回鱒ヶ崎三本松古墳調査指導委員会会議録

1 開催日時

平成27年9月10日(木)午前10時～11時45分

2 場 所

流山市西平井倉庫

3 議 題

- (1) 古塚碑の保存処理状況について
- (2) 鱒ヶ崎三本松古墳調査の調査状況
- (3) 今後の調査方針について

4 出席委員

下津谷委員、滝沢委員、渡辺委員、
松井委員（11時で途中退席）

※保存処理実施業者 （有）新成田総合社 倉橋氏

5 欠席委員

古谷委員

6 事務局員

小栗館長、北澤主任学芸員、宮川学芸員、伊藤調査員

7 会議内容

事務局から第1回会議以降の石碑及び古墳の調査経過について、配布資料をもとに説明を行い、各委員からの質問や確認事項、指摘事項についての意見交換を行った。

(1) 石碑についての意見・指摘事項

<報告事項>

保存処理作業は新成田総合社に依頼し、7月9・10日から石碑基部のモルタル除去及び表面のクリーニング（水洗い）作業（資料1

ー 2・3・4) を実施した。クリーニング終了後(資料 1-5)、7月 28 日から表面のコーティング作業を実施(資料 1-6)し、現在コーティングの調整作業を行っている。

これまでの経過の中での問題点として、石碑表面に認められるワレ及び剥離面(添付写真○印等)の処理については松井先生の見解を伺いたい。また、石碑基礎部分が存在しない中で保存修復後、現地で設置する方策についてのコメントも頂きたいと考えております。

< 確認事項及び意見・指摘事項 >

- ・コーティングの素材はどのようなものなのか。

メチルエトキシシラン系の樹脂(SS101、日本コルコート株式会社)というものを使用している。

これは、コーティング剤である。このコーティング剤を利用することで、石碑表面に膜をはり、撥水効果を利用して碑面の劣化を防ぐものである。

- ・使用したコーティング剤はどれくらいの量をつかったのか。

平米あたり 450 g 使用した。通常はどぶ浸漬で 1 kg くらいである。予想より石に浸透していかなかったこともあり、使用量が少なくなった。

- ・保存処理後の耐久年数はどのくらいあるのか。

このタイプの保存処理が行われるようになってまだ 30 年ほどである。50 年、100 年持つかは不明であるが、当面 30 年は問題ないと思われる。

- ・剥離面について

コーティング剤は碑面のワレている所や浮き上がっている場所(隙間)には対応できない。このためワレや浮いた場所は、保存処理を行っても一番弱いところになる。仮に屋外にそのまま戻した場合には、雨水などによって、剥離が進む可能性もあり、充てん剤を使って補修することを勧める。エポキシ樹脂で隙間を充填するだけでは、破綻をしやすいので、石碑と同じ石材を混ぜたものを使用し、違和感がないように処理する。

- ・擬石材を使用した場合、石碑の色との違いが出てしまうのか。

違いはでる。違いがないと逆に補修した場所の特定が難しくなる。

- ・現地に石碑を戻す場合、基礎部分がほとんどないと分かった状況での復元方法はどのようにすればよいか。

石碑下部にソケット（はめ込み式・コンクリート製）を作る方法が考えられる。

- ・レプリカの作成について

今後の方針にもよるが、仮にレプリカを作成する場合は、碑を寝かせている現在の状態で型をとるのが適している。

< 検討事項 >

保存処理の課程で2つの問題点が挙げられた。

1点目は、碑面の「ワレ」と「浮き」の修復方法、2点目は基礎がない石碑の復元方法である。2つとも大きな問題であるため、10月7日に開催予定の文化財審議会に諮って方針を決定したい。

(2) 古墳調査についての報告及び意見・指摘事項

< 報告事項 >

第1回会議後の調査経過について資料に基づき説明を行った。古墳のトレンチは、T3～10までの調査を実施している。T1・3～6では周溝が確認されている。T4～5にかけてはくびれ部が確認できる。

一方、T7では中世以降の遺構により周溝は削平を受けていることが確認され、前方部の状況は不明である。T8では、斜面部から墳丘の版築面が確認されたが、等高線が乱れている墳丘裾部分では関東ローム直上からガラが出土しており、古墳周辺の土取り等による攪乱を受けていることが明らかとなった（資料2）。T1・4・6の断面図では、T1に比べ、T6の周溝が浅くなっていることが明らかとなっている、調査状況から周溝は全体に浅く、前方部に向かって古墳時代以降の削平を受けている可能性が高いと考えられる。

また、T4の墳丘下部からはハードロームが確認されている。ロームが裾のやや上の部分から検出されている点については委員のみなさんからの意見を頂きたい。（資料2-2）

墳頂部の状況では、T9・10のトレンチで石碑及び稲荷社があった下部の状況を確認するための調査を行っている。断面図の状況から現地地表から60～80cmの深さまで攪乱を受けていることが明らかとなった。

約 60cm の深さからは、近世の瓦が大量に出土しており、現在の石碑や稲荷社以前の建物が存在していた可能性が高いと考えている(資料 3)。

これらの調査経過を踏まえて、参考となるのがレーダー探査の結果である(資料 4・5)。第 1 回会議後に(株)中野技術のレーダー探査の結果が提出された。報告では、くびれ部から後円部にかかる範囲で主体部と考えられる反応が認められた。また、稲荷社の近くでも反応が確認されているが、これは T9 で出土した瓦を含んだ攪乱の範囲が広がっているものと考えられる(資料 4)。筑波大のレーダー探査は、8 月 21 日に追加調査(前方部)を実施した。前回の調査成果とあわせると発掘で確認された周溝の範囲とレーダーの反応はほぼ合致しており、良好な結果が得られている。

資料 6 は、9 月 3 日に実施したドローンによる空撮である。今後も調査状況に合わせて実施していく予定である。

今後の調査では、主軸方向及び後円部の横軸方向、東側斜面部にトレンチ調査、主体部の入り口を確認するためのトレンチ調査、周溝の全容を確認する。

※台風 18 号接近の荒天のため、現地確認は中止とした。

<意見・指摘事項>

- ・ 南側だけでなく、北側の斜面部にもトレンチを設定して墳丘の状況確認を進めてもらいたい。
- ・ 盗掘坑前面にトレンチを設定して、南側墳丘裾部の状況確認を進める。
- ・ 周溝部分の表土を除去し、周溝の全容を把握すること。